
御口直しに御話を

ペンシル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御口直しに御話を

【Nコード】

N6028Z

【作者名】

#ペンシル

【あらすじ】

夏休み間際のことである。

俺はとある先輩に連れられて、怪しい部活の一員にされた――春に入部届を提出したことになるので、実際には一員にされていたことを聞かされた、というのが正しいか。

その部活というのが、異様で奇天烈なもので、これぐらいだったら「『帰宅部』という部活がある」物語とか、単純に「スポ魂」的な物語とか、あるいはラブコメチックで乙女チックな部活をテーマにした物語のほうがよくばど良かった。というか、そちらこそ俺の

望む「巻き込まれるべき部活」だと思う。

現実残酷だ。

そんな聞きなれた――聞き流していた言葉が強くなるの、今日という、俺の幽霊部員卒業の日。

殺人集団と繰り広げられる、温かで幸せな話。

が、その日から始まった。

01 始まりの豚汁

あらたまばやすみ
新瑞橋休という人物を一言で表すとなると、それは結構な量となってしまうのでやはり文章で説明したほうがいいのだが、しかし彼の特徴を表すとなると、今度は単語一つのほうが都合良い。
非常に面倒くさい人物である。

とんだかんだ言って、最終的に一言で済ましてしまったが——いやまあ、最終じゃないか。当然、俺は別にその一言で彼を語りきれたなどと満足するわけでない。もちろん、彼という人物を語りきれたその瞬間に自分が満足するとはとても思えないのだが、それはそれとして、俺は今、新瑞橋休について語ることを余儀なくされていると言ってもいい。

余儀なくされているということは、それはすなわち。

少なくとも俺は、手のひらで踊らされているか、手の中にあるか、手の内だということだ。

誰の手のひらで？

誰の手の中に？

誰の手の内なのだ？

それを説明するのは、別に俺の役割でない。

いまだに謎であるとして、その謎を解き明かすのはあくまでも俺の役割でない。

きっと誰かの役割だ。そうじゃなきゃ、明かさなくてもいい真実なのだろう。

とりあえず、小論文でも公表するような形で、俺は新瑞橋休という男を語るのだ。

当然、そこには俺の偏見が含まれているわけで、そもそも三人称的に見たって伝わることもない『情報』というものが俺というフィクターを通せばどうなるのかと、そういうことを考えながら面白半

分に話を聞いていてくれればいいと思う。

新瑞橋休。性別、男。高校二年生。身長、体重共に高校二年生の平均並み。成績は中の下で、とある文化部に所属している。ちなみに部長。容姿端麗。

一般的なプロフィールに俺が注釈を加えるとすれば――性別は男ながら、性格に若干女々しい部分があつて、そうでない部分は男らしく歪んでいる。高校二年生であるが、先輩にも後輩にも同じ態度で接する。身長、体重共に平均並みではあるが、少しやせ方で筋肉質ではない。成績は中の下であるが、雑学は上の中。とある文化部に所属していて部長でもあるが、一般生徒から委員会の人物、生徒会役員や教師等と幅広く顔が広い。容姿端麗であるが、どちらかというと子供っぽくて可愛らしいという印象が強いらしい（俺の知り合いの女子に聞いた）。

一単語で表すと、『変態的』である。

いや、あまりにも救えなくて、落ち度のあるオチとしては充分すぎる気もするのだが、現実問題、彼の変態度合いは海を越え山を越え、今ではブラジルまで伝わっているとか――というのはさすがに偏見とも言えないような、しかしまったく笑えないただの冗談である。

とにかく、俺と新瑞橋……先輩（一応だが、先輩だ。しかし俺は基本的に彼を先輩扱いすることはない）は、そこそこに密接な関係であつた。

そこそこに密接という表現にもおかしなものがあるが、別にそれは単なる俺の国語の成績の悪さゆえの話であつて、真におかしな点というのは、彼と俺の関係性というか、出会いというか、あるいは因果性であつた。

ところがまあ俺は、その『おかしな点』に自分でも驚くほど無頓着であつた――他人事のように聞こえるが、そう、その通り。

まるで他人事のごとく、俺は華麗に問題点と呼べる『おかしな点』を見過ごしてきた、見逃していた——否、無視していた。

まあ、俺に関わる話は今のところ、どうでもいい。

変わっているというのは、あくまでも特定の人に対してだけで、別に普通に話すし、別に普通に食べるし、別に普通に歩くし、別に普通に——生きている。

それでも彼の変態性は、やはり一般人と変わっているのだ。というか、彼は人であって人にあらず。

生物学的には問題なくホモ・サピエンス——人類の一員である。が——人道に外れているというか、人らしからぬ中身が、人の皮を被っているというか。

彼は自分のことを「人でなし」と言った。

ああ、なるほど。

恐ろしく的を射た——的を射抜いてそのまま畳を突き抜けるくらい、鋭い指摘ならぬ表現だぜ。

なんて、俺は感心したものだ。

と、言うのも。

紹介が遅れたというのにはまだ早いか、しかし俺が気後れする前に言っておこう。

彼は人間離れた能力を持っている。

とは言うものの、『小説家になろう』に掲載されているようなファンタスティックかつエレガントな、超人的能力というわけではないんだ。

荒唐無稽で、質量保存の法則を無視したりと人間の常識を覆すような真似をすることなく。

人間という枠を超えないまま、彼は人外であった。
少なくとも、俺が今まで見た中ではそうである。

言葉は人を殺す。

イジメ問題——言われなき迫害は、まず言葉から始まる。

何とでも言える、言葉の暴力。刃物より鋭く光り、金槌より鈍く輝く、薄汚れた殺人道具。

言葉。

あつて困り、なくて困る、取り扱い注意の危険物質。

いや、質量はないから物質じゃあないか。

それでも、重みはある。

事実、言葉によって紡がれ詰まれたストレスを苦に自殺する人が後を絶えない。

彼は言葉の被害者であり、そして今、加害者側に立てるという状況にある。

すなわち、彼は言葉で人を殺すことができる。

具体的に言えば、心が折れるような猛毒の暴言を、あどけなき子供のごとき無邪気な笑みを浮かべながら吐くことができる。

ありふれた設定？

いやいやおいおい、冗談が過ぎるぜ。

冗談に過ぎないというべきか。

グレーゾーンに生きる、人の間にあらざる男。

新瑞橋休。

何だかんだと述べたものの、いかに歪んだ存在とはいえ、ベースはやはり人間で——垢抜けなくて抜け目のない、そういう人外は。何と言っても、俺の先輩なのである。



「さて——これから豚汁と書いて『とんじる』と読むべきか、それとも『ぶたじる』と読むべきかどちらがいいかについて語りたいと思うんだけど」

「帰っていいですか」

夏休み間際のとある日、その放課後のことである。

俺は突然にして、先のような質問を問いかけられた。

階段を下りようとして、一步目を右足で踏み出そうか、あるいは左足で踏み出そうかと悩む——俺は悩んでいなかったのだが、ところで階段を下りようとしていた俺にとって、豚汁の問題は俺が一瞬で思いついた問題と似たようなものだった。

というか、死ぬほどどうでもよかった。

俺に問いを吹っつけた人物は、俺にとって友人ではなく、しかし知り合いで、同時に先輩でもあり、どちらかと言えば親友と言えなくもない。

あれ、何かがおかしいぞ？

そうだ、友人と親友は同じだろう——そう思った方は、よくその二つの単語を思い浮かべてほしい。

ほら。

友人は人のことを指して、親友は友のことを指す。

端的に言って、目の前の豚汁馬鹿——新瑞橋休は人でなしである。

で、別に新瑞橋は豚汁のことを終始考えているような奴ではない。それは人でなしというか、ただのアホ、あるいはそれこそ先ほどの名言らしき暴言の『豚汁馬鹿』一言で済ませることができらるう。

いや、つまり……これは俺の説明の要領が悪いのかもしれないが、新瑞橋の奇妙な言動は今回に限ったことじゃないのである。

メイドについて語ったり、地球誕生について語ったり、鉛筆削り器の素晴らしさについて語ったり、作画崩壊しているアニメのスクリーン再生がいかに面白いかを語ったりしている。

要するに、アホなのである。

……………あれ、一言で済んじゃったじゃねえか。

俺のおよそ二千五百文字にわたるアンタに対する考察時間を返せ。そしてこれ以上意味のわからない話題で俺の時間を浪費しないでほしい。

暇ではないのだ。

「いやいや、別にキミの時間を浪費しているつもりはないよ。だって、これは有意義な時間のはずだ」

「それはアンタの事情と勘違いであって、こちらは義理も事情も勘違い的な発想もねーよ」

おどけながら言った新瑞橋に、俺はにべもない冷たい言葉で返した。

しかし、新瑞橋休。

言葉はいつも彼の味方。

「しかし、でも、それはやっぱりキミの主観的な空論に過ぎないよね。キミから観れば、ああ——別に空論ではないのだろうけれど、しかし僕から観れば、否、僕から聞けば、それはやはり妄言だよ。意味を成さないぜ」

だからと言ってどうということもないけれど。

新瑞橋はそう言った。

つか、僕の言っていることも、同じく妄言の果ての空論だけだ。

そうも言った。

そして話は戻る。

「豚汁のことについて語る前に、多目的室に行こう。なんとなく作ってみたけど名前をつけるのが面倒くさいという理由だけで、なんと校舎全て合わせて九つもある多目的室の一つに行こう」

その非常にむなしい説明に対する反感も無きにしも非ずだが、いやしかし、それよりも何よりも、多目的室は少なくとも、豚汁について語るために作られたわけではないと思うんだ。

あと、多目的室は授業や部活で活動拠点としている生徒がいるから、多目的と言えば多目的である。

九つもあったと言うことは知らなかったけど。

というか、考えたことが無かった。

実のところ、まだ学校を把握し切れていないのが現状である。

あ、二年生の新瑞橋を先輩という時点でわかんと思うけど、俺は高校一年生だ。

「いやあ、キミを様々な話題で引き止めて三十七回目、やっと初めて立ち話じゃないわけだ。実はね、三十回目のときに、次の素数で誘おうと思っていたんだよ」

「三十一を素数だとは思わないのかよ、高校二年生」

「ああ、僕は三十一だけは例外的に素数から外しているんだよ」

「変わってるなあ！ 常識的にはそれはアウトな考えだからな？」

「いや、その昔、三十一に両親を殺されてからね……」

「アンタの両親健在だろう、保護者会で見たぞ！ 勝手に殺すなよ！
そして三十一って数字はお前が思っている以上に優しくて安全安心だから！」

「じゃあ鶴舞君、いったいどんな数字を二乗したら三十一になるんだい？」

「ぐ………って、別にそれは素数でなくても似たようなのはあるだろうが！」

コツコツと靴を鳴らして（俺の通っている学校は土足で入っていることになっている。これのせいで、以前新瑞橋に『靴箱を開けたときにラブレッターが入っているというイベントを味わえない悲しさ』について語られた。忌々しいぜ）、俺の前に行く新瑞橋。

俺から見えるのは、別に何の変哲もない学ランの背である。

あとは、健全で健康的なちょっと長めの黒髪と、ポケットから少し溢れている手の一部。

それだけしか見えない。

余裕悠々と歩いているのだろうと推測するのには、充分すぎるほどだった。

つか、何故俺はついていっているのだろう。

こんな馬鹿な雑談までして。

説明しなおすような形で悪いが、新瑞橋はありていに言って、単なるイケメンである。

詳しく説明したいものでもないけれど、俺の気持ちはともかくとして説明すると、顔立ちが非常によく整っている。こいつの顔を元にして福笑いをしたら、たとえ目隠しをしていてもこのバランスには戻せないだろうと思えるくらい、とにかく目鼻と口、眉等々、整っている。

もっとも、イケメンだったらモテるというわけでもない。

某猫型ロボットみたいにならオシマイだろう？

俺的には一頭身（頭部のみ！）になって「ゆっくりしていいってね！」とか校門の前で言っている光景を望むのだが、しかし残念なことに――女生徒の方々には安心なことに、新瑞橋は八頭身であった。容姿は完璧である。

ところがまあ、性格は八方美人とはいかないようで——かといって、一方からだって受け入れられそうな性格ではなく、新瑞橋はありていに言って、単なる変人——人でなしだから、実際には変態生物であった。

思考が常人レベルじゃないというか。

人はそれを『イってる人』とか『アホ』とか言うんだけども。

というわけで、俺は彼に先輩としての敬意を込めて、精一杯に彼のことを『アホ』と称することにしよう。

「鶴舞君。相手が僕だったら何を考えてもいいってわけじゃないんだぜ」

俺に背を向けていても俺の考えていることがわかるあたり、変態レベルは高い。

たぶん、異星に住む戦闘民族が「こ、コイツ……できるッ！」ってなるくらいだ。

基準がよくわからないかな？

なら、多分スカウターが爆発するくらい、新瑞橋の変態度合いは凄い。数値にしてはいけない。

計り知れないって言う奴さ。

それはそうと、少年漫画みたいな表現でしか彼を表せない俺の国語能力のなさに絶望しそうであるのは、語り部として秘密にしておきたかったところである。

ああ……ちなみに、変態レベルと読心術の関係性だけど——それはまあ、なんとなく？

キアラ的に？

やばい、僕まで変なことを言い始めてしまった。

新瑞橋が伝染ったかな？

「鶴舞君。やっぱりキミは失礼なことを考えているだろう——と、着いた着いた。じゃあ、入って頂戴」

いつの間にやら多目的室の前——ってことはなく、ちゃんと向かっていることはわかっていたのだが、とにかくまあ、俺と新瑞橋は多目的室の前にいた。

扉についている小さな窓枠には黒い画用紙が向こうから張り付いてあって、中がどうなっているのかわからない。

ただ、嫌な予感はした。

しかし人間、好奇心は強いもので——覗いてみたいという感情が、邪な動機以外で始めて発生したのも手伝ったのか、俺はその扉に手をかける。

さながら、『小説家になろう』に掲載されている小説に登場する主人公が異世界への扉を開くその瞬間のようで——しかし現実には、教室の扉を開くだけであるのだが！

開いて、驚愕した。

そこにあっただのは——メイド服が色違いや形状違いで二十着だったり、地球誕生について書かれた分厚い本が十一冊だったり、メーカー別の鉛筆削り器（手動から自動まで）二十三機だったり、作画崩壊しているアニメのポスター六枚だったり、下足箱だったり——『豚汁！』と墨で書かれた習字用紙だったりした。

驚いたっていうか、呆れた。

今まで聞いてきた全ての話に関連するグッズが置いてあったのだ。多目的室はアンタの家じゃねーんだよ。

「ああ、そう言われると思ったから、あらかじめ生徒会から部活動ということで信任を受けてる」

「マジで!？」

「僕は嘘をつかない」

「さっき両親が死んだって嘘をついたよなあ!？」

「ちなみに、キミの分の入部届けも提出してある」

「はッ! 大嘘吐くなよ、新瑞橋先輩! あれって、正式な書類だから印鑑とかが必要だろ――」

「ああ、そう言われると思ったから、あらかじめキミの家から印鑑を拝借しておいた。ほら、返すよ」

言って、懷から印鑑を取り出す新瑞橋。

マジかよ……。

住居侵入、窃盗――本格的にお縄な内容だぞ……。

「部員はキミと僕を含めて六人」

「最低限の数合わせてって感じバリバリの人数だな、同好会レベル？」

「いや、実際は部長と副部長がいれば活動内容が何であろうと部活として承認されるからねえ」

「この学校の部活審査制度は腐敗している! つーか俺、生徒会に入る!」

腐ってやがる。遅すぎたんだ……いや、マジで。

というか、残りの四人が物好きすぎて、仲良くなれる気がしないぜ。

新瑞橋と書いて、『こんなの』と読むことを前提にして、次の文をよく読もう。

俺、新瑞橋がいっぱいとか、本気で勘弁だぜ!

「おいおい、釣るまい君」

「漢字がおかしいぞ。このタイミングで間違えるな」

何を釣らないんだよ。

お前が『釣るまい!』と思うほどのものがこの世にあるのか。

誠に遺憾ながらとてつもなく驚きだぜ。

「言っておくけれど、別に僕は豚汁の読み方について結論を出そうなんて、人類の命題たる問題に口を出し首を突っ込むつもりはないんだ」

「人類の目標が低すぎる」

「たとえば、さわりが豚汁で始まるこの話題は、人類のあるべき姿に帰結する」

「無理だろう———というか、そっちのほうがよくぽど命題だろう」

たぶん芥川とか太宰とか夏目とか、そこらへんのクラスの文豪が揃わないと豚汁から人類は無理だろう。

まあ揃ったとして、どうやって持っていくのかはわからないけれど。

逆に聞いてみたいよ。

つか、俺が部活に入らされている云々の話はどこへ消えた。

俺の脇を抜けるようにして（俺は入り口前で立ち尽くしていた。中に入る気はまったくしなかったのである）新瑞橋が中に入る。

そのまま下足箱に腰をかけ（ちょうど勉強机と同じサイズだ。分解式の一つ『拝借』したというところだろう）、足を組んで俺のほうを向いた。

そして、思い出したように。

「ところで、どうだろう。僕たちの部活に入らないかい？」

「『入らないかい？』も何も、入部届は提出してあるんだだろうが」

「まあ、そうだけだ」

「とはいえ、既に印鑑はこっちのもんだ。退部届だって提出できるから、断ろうと思えば断れ——」

「ああ、そう言われると思ったから、あらかじめキミの印鑑を再度

拝借しておいた」

「いつの間に！」

ああ、ない！ ポケットの中に印鑑がない！

一瞬の早業！

そして本格的にこの先輩の将来への不安！

俺はどうすればいいんだ！

「笑えばいいと思うよ」

「苦笑いしかできねえよ！」

あるいは泣き笑いか。

かくして——いや、どのようにしてこうなったかについて、疑問はつかないのだが、とにかくして、俺はいつの間にやら怪しげな部活の一員となっていた。

……春かららしい。

すなわち、この夏休み間際、俺は晴れて幽霊部員ではなくなったそうだ。

……………嬉しいか、これ。

まったく嬉しくないぞ。

これはもう、他の部員が全員女子で、その女子全員が超可愛くてハーレムエンド一直線——とか、そういう展開じゃないと報われないような気がする。

まあ、断れない事情があるにはあるので——そのあたりはまた今度、日常が非日常に変わるとか、そういう厨二チックで格好良い出来事が起こってから話そうと思うが、とにかく、俺は断れないので。

とにかく、今回の話。

豚汁……ということらしい。

01 始まりの豚汁（後書き）

僕らしい作品を作ろうと思ったら、こうなりました。

しばらく活動を停止していました。なのでこれの執筆、結構ハードです。思い付きではありませんし。

とある方々に執筆再会をお願いされて、今まで書いていた作品を書き直すのが嫌だったものですから今作です。

色々ズタボロかもしれませんが、よろしく願います。

02 誤算ありき勝算

「前回の投稿から間が空きすぎてないか？ 冬休みがあったはずなのに、半月もかかるもんなのかよ」

「それだけ忙しいってことだよ。確かに冬休みとはいえ、書き手の彼には留年がかかるような事態が起こっているようだから」

マジでか。

勉強しろよ。

執筆なんてしてる場合かよ。

なんて、手のひらを返したような反応をするのも無理はないだろう。

「しかも携帯からちまちま書くのが面倒だという、面倒くさい性格の持ち主ときたもんだ。僕たちにも色々なセリフや設定がまだまだたくさん用意されているのに、あのお馬鹿さんは『ラムスデン現象』一つさえ覚えられないらしい」

そんな脳味噌で小説が書けるのか？

しかも、ラムスデン現象って——おいおい、家庭科で赤点を取ったとか言うんじゃないだろうな。

家庭科って、基本どの学校でも一学期中に一回しか試験がないだろうから……野郎の学校も一回だろうし、その一回で通知表がとんでもないことになるんじゃないのか？

まあ、だから留年の危機だよな。

留年とかしたら間違はなくパソコンは触れないんだろうから、友達とか何だかに訊いて、とっとと留年を回避してほしいものだ。やれやれ。

「それはそうと、なんでアンタはアンタでスタイリッシュな行為をしているんだ」

「いやそれよりも、まずは僕がどういうポーズをしてるか説明したほうがいいんじゃないかい？」

ああ、そうか。面倒くさい。漫画やアニメと違って、小説には絵がないからなあ。出版されている小説ならともかく。それにしても、絵師さんって偉大だよな。最近はライトノベルというと萌えだとかエロだとか、そっちの方面に焦点が行きがちな世の中だけど、そんな世の中に一石を投じる地味な挿絵のライトノベルとか出てくれないうだろうか。いや、純文学を読めばいいという話ではないんだぜ？あくまでライトノベルであるべきだ。

で、そうだそうだ。エロで思い出した。新瑞橋は現在、ブリッジをしながらエロ本を読んでいる。

部室にエロ本が置いてあるとか昭和じゃねーのかと疑いたくなるが、別に現代の年号は平成である。ちなみに平成二十二年、とある中学校の野球部室にエロ本が置いてあったのを目撃したことがあるから、部室にエロ本が置いてあることはなんらおかしくない。

つまりは、いつもどおりの俺の偏見だということだ。

「いやさ、逆立ちすると世界が変わって見える——とは僕の妹である新瑞橋努（つひみ）の言葉なんだけど。僕は別にブリッジでもいいと思うんだよね。どうせ逆さに見えるし。妹は平衡感覚がいいけど、僕よりは体が硬いからね。僕は逆に平衡感覚があまり良くない。それでもって、こんなポーズなわけだ」

ほう。お前の妹も変態なのか。そうすると、お前みたいな両親もいるのか？ いやいや、救えない一家だな。裸族だって新瑞橋一族よりはまだ健全だろうよ。

っーか、部室でそんなものを読むな。家で読め。

「うん、ところで思うんだけどさ。学校プレイがエロ本エロゲ共に有力なのは、そこに温かい背徳感があるからだと思うんだ」

「おお、話を聞く気ナツシングだな！ え、何、これから新瑞橋プレゼンツエロ本エロゲの美学でも始まるの？」

「いや、それは書き手の知識と時間が足りないから無理なんだけどさ。いずれ語るよ。安心して頂戴」

「何を安心しろと？」

「さて、女性読者が離れそうな話題は終わりにして——豚汁について話そう」

「やっぱり俺、帰っていいかなあ！」

誰だかの留年危機の話題はともかく。

エロ本の話題もともかく。

新瑞橋は譲ることなく、あくまでも笑顔で豚汁の話題を引っ張ってきた。

読み方の問題だっけ？

どうでもいいけど、思った以上に面白くないからな、豚汁ネタ。

これがもし『小説家になろう』に掲載されている小説だったら、まったく伸びないだろうよ。

数字が証明している。

だいたい、コメディってジャンルが結構伸び悩むんだから。

人気があるのは、やっぱりファンタジーか恋愛だよな。両方とも、そこそこに男女の受けがいいし。

一応、ジャンルはファンタジーだけどな、この小説。実際、ファンタジー要素なんて今のところ皆無だろう。なんか意味深な伏線を張ってはいいても、だけどこれ、異世界への扉を開くとか、あるいは想像を絶するような怪物に襲われることもないじゃないか。

詐欺か？

PVやユニークを得たいがための詐欺か？

するとなんだ、もしかして、今後恋愛タグもつくことになるのか？
……女性キャラが、さわりが重要な第一話で一人も登場しなかったこの小説に？

ないだろうな。さすがにそれはない。

疑問符を四つ続けておいて、なんだけど。

あっても、心が折れるだろう。あまりのレベルの低さに、書き手も読み手もな。

話を戻す。

というわけで——なんて、いつも言っているから癖として言ってしまうようなのだが、今回にいたっては——なんというわけもなく、部室である多目的室には、それはもう、たくさんのガラクタが置いてあった。それらは今まで俺との会話で話題に上ったものというか、主題の物品——ほぼそのままにしたものである。

メイドの話題なら、メイド服を。

地球の話題なら、地球儀と本を。

鉛筆削り器の話題なら、鉛筆削り器を。

アニメの話題なら、アニメのポスターを。

下足箱の話題なら、下足箱を。

新瑞橋は用意する。

そして豚汁もまた、用意されていた。

……『豚汁！』って書かれた習字紙。

どうなんだろう、これ。

せめて模型を持つてくるとか、もう少しいい方法というか、具体的な品物はなかったのだろうか。

あったとしても。

新瑞橋がこれを選んだということは、それは人に理解できない選定基準によって選ばれているということだ。

何度繰り返し見たかは知らないし、これから何度繰り返し返すかも知ら

ないが、奇特定の読者にでも数えていただくとして。

新瑞橋休は人外である。

それはそうと、あからさまに嫌な素振りを見せた俺に対し、新瑞橋は自分らしさをまったく失うことなく、屈託のない嫌な笑顔を浮かべながら言いやがった。

「そんなに嫌なのかい、豚汁の話題が。それならば仕方なく取りやめよう。まったくやれやれ、わがままな後輩を持ったものだなあ」

いやいやまったく、こんなにわがままな先輩を持ったものだとも俺も感心しているぜ。

「そうかい、気が合うね——キミと気が合うってのは、僕としてはいささか筋書き通りで気に入らないんだけど」

「は？ 筋書き通り？」

「……いやいや、なんでもない。これは失言。口が滑った。鶴舞君が日常的に発しているギャグくらい滑ってしまったね」

「俺、別に普段からギャグを口に行っているつもりはないんだが」

むしろ、アンタが言葉遊びと思っている発言、案外親父ギャグだったりするんだよ。

ギャグばかり言っているのはアンタだぜ。

しかし、アンタは自覚していない。

そういえば、俺が最初に新瑞橋に会ったとき、彼は開口一番にこう言った。

「詭弁、嘘、冗談、言葉遊びと言葉の綾は——僕の友達で切り札だ」
いやはや、格好いいね、厨二的で。思春期真っ盛り！ ははは、さすがいつまでも若々しい新瑞橋先輩らしいぜ——とか。

皮肉も過ぎる言葉を並べたくなるくらいに、格好良さげな言葉を決め顔で言った。

思い返せば、言った本人でない俺が赤面したくなるくらいに滑稽で恥ずかしげなセリフだったと思う。あれを言われたり言わされるくらいなら、校舎の屋上から好きな人に告白をするほうがまだマシだったぜ。いやホントの話。

まあ、言った状況や、出会いの話は追々するとして……。

「そうなるよ、僕は親父ギャグとも友達だということかな？」

「それは、もはや親父と友達ってことでいいんじゃないだろうか」

「いやいや、それは違えらう鶴舞君。だってキミ、親父ギャグっていう言葉を萌えイラスト化したのと、単なる実写の親父——どっちが萌える？」

「そもそも親父ギャグっていう言葉を萌えイラストにはしない」

関係なくもない話をするよ、元素を萌えイラスト化させた、オタク系の方々に推薦の一冊が本屋で売られていたような覚えがある。

俺は手に取りさえしなかったけど。

「おいおい、親父のほうが萌えるって言うのかよ！」

「言ってるねえ！ モノローグでさえ言ってるねえ！」

「……………いやまあ、僕も僕として言われなき——言うまでもなき変態だけでも、僕はあくまで性欲にもっとも忠実な男であるというだけであって、その性欲の対象は女だからね？」

「まるでそうでない人物を論すように言うな！」

つか、女性ファンが離れそうな発言をするな。

仮にもアンタはイケメン設定なんだよ。

とまあ、こんな調子で続けていると日が暮れる——というか、暮

れてしまったので、一日明けて再集合する。

以下、翌日の放課後。

「あれ、もう一日経ったことになってる？」

「なってるな」

「え、じゃあつまり、今日が終業式だったんだよね？」

「そうだな。何事もなかったかのように半日分がものの二行で済まされた――俺がモノローグで済ましたんだが、今日は終業式だったな」

ダラダラとそこらへんを執筆している時間はないのだ。

善でなくとも、急がなければならぬことはいくらでもある。

だからと言って、こんな簡単に日にちを変えられては、流し読みをしている人はわけがわからなくなるだろうに。

さすがに何も説明を入れなければ混乱するので、「まるでそうでない人物を論すように言うな！」という俺の発言以降を、かいつまんで解説しようと思う。

俺の趣味も当然のことながら女性であることを釈明し（個人的には、せめてそこぐらゐは描写して読者の誤解を解いておきたかったところだ。本当に誤解しているかどうかはともかく）、あとはまあ、本当に伏線にもならないような雑談を続けたわけだ。世間話とも言う。

後はお互い私生活になるのだが、俺はいつもの通りで、妹とそこそこに戯れたり、風呂に入ったり、寝たり、朝起きて学校に来たりと――それこそ描写するまでもないような、健全で健康的な一学生の生活を送っていた。

で、現在部室にいる。終業式も早々に終わり、運動部は真っ先にグラウンドで活動を開始、文化部もまた楽しく活動を開始している

頃だ。

この部活動名不詳の怪しげな活動も、文化部の一つとして元氣よく活動を開始——いやそもそも、元氣よく活動しているのは新瑞橋一人である。

っーか。

「他の部員はどうしたんだよ。いつまでたってもこねえじゃんかよ」
「そりゃそうだ。言ってなかったかな？ 僕はあくまで入部届を代わりに出してあげただけで、実質的に活動参加への交渉はこれから行うんだから」

「はあ？……つまり、お前は俺のときみたく、恐喝のような進言で引き入れるつもりかよ」

「いやいや、もっと平和的。っーか、僕としては極めて平和的な手段を用いるつもりだよ。全てにおいてこのやり方で決着がつくと言うのなら、この世から戦争も紛争も、あるいは革命さえ起こらなくなるぐらい、超が付くほど平和的な手段をね」

印鑑も——もう使ったけど今回は使わない。

新瑞橋はそう言った。

ほう。

できれば、俺のときもそうしてほしかったと言わざるを得ない発言だな。

して、その方法とは？

「話し合い」

目からうろこである。



初話で『始まりの豚汁』というタイトルに惹かれてやってきたという方がいるのならば、これは完全に俺の不手際だったと言ってもいい。

とある書き手の不手際だったと言ってもいいのだけれど、しかしながら、豚汁うんぬんを重視するようなストーリーでは一切なく、少なくともしばらくの間、俺と新瑞橋が部員集めに走る話題で一杯の予定だ。

そう考えると、新瑞橋の不手際であるような気もするから不思議だ。

「それは気のせいだぜ。僕は悪くない」

「印鑑を勝手に拝借したことは間違いなく悪い行為で、心なき好意からのありがたくない厚意なんだろうけどな」

「なあなあ鶴舞君。どちらかと言ったら、キミのほうが親父ギャグが好きなんじゃねーのかい？」

萌えてしまえ。

そう言われた。

萌えねえよ。俺はいつまでたっても萌えないゴミなんだよ。

特に二次元にはな。

「そんなことを言うけどね、鶴舞君。燃えないゴミだって、やる気を出せば燃えられると僕は思うんだよ。彼らは単純にやる気がないだけで、僕たちが精を出して燃やそうとすれば燃えられるはずさ」

深読みするな。

燃えないゴミにそこまで知能はない。

だいたい、俺たちが精を出せば出すだけ、燃えない奴らは怪しげな気体を出すんだぞ。

地球に優しくしようじゃないか。

「キミ一人萌えてしまおうが、困るのはキミの知り合いのクラスメイト女子くらいじゃないかな」

「困るっつーか離縁確定だな」

たぶん。

「はっはっは、別にいいんじゃないの。キミは孤高にたたずむ狩獵人みたいな感じで、人を寄せ付けない感じがいいと思うよ」

「人に一匹狼的なキャラを薦めるな」

孤高にたたずむ狩獵人が、萌えキャラにはあはあ言ってたらどう思うよ。

そのまま高台から飛び降りろって気分にならないか？

キャラ崩壊にもほどがあるぜ。

「まあそれはともかく、鶴舞君。これを見てくれよ」

話の転換はいつだって唐突である。

新瑞橋は一枚の紙を懷から取り出した。小さく折りたたまれた紙である。

懷って便利だよな。

何でも出てきそうだ。

四次元懷、とか言ってる。

俺はその紙を受け取る。

広げても、別段大きな紙となるわけではなかった。

書かれているのは四人の名前――しかし俳優とかアイドルとか、世間に知られるような有名人の名前ではなく、それでもこの学校で、その四人は少なくとも有名所であった。

一学期だけしか過ごしていない一年生の俺でも、わかるくらいに。

「わかんと思うけど、それに書かれている人物たちが僕の交渉相手だ」

「ああ、わかる。それとなく、否応なくわかつちまうぜ——だがしかし、いったいこれはどういうことだ？」

「と、言うത്？」

「これだけの奴らをそろえて、お前は世界でも救いに行くつもりなのか？」

そう思えるほど、異常な噂がたつ人物たち。
を！

新瑞橋はそろえようとしているのだ。

大変厄介なことに。

「世界を救うというのはいささか言い方が過ぎているような気がしないでもないけれど、しかしキミの気持ちもわかるぜ鶴舞君。彼、彼女らはこの学校で瞬く間に有名になった人たち——と、今は言うておこう——なんだから、そりゃ確かに、こんな得体の知れない集団の一員となるわけがないよね」

そりゃそうだ、とばかりに肩をすくめる新瑞橋。

同時に、深い笑みを浮かべなおした。

「だけどね、歴史の話になるけれど、まるで名もない革命家の下に優秀な人材がつくというのには——もっと言うなら名のある人間がつくというのには、何も大きな理由が必要だと決まったわけじゃないんだよ。たった一回救ってもらったというだけで仲間になったのかもしれないし、道端であつたから仲間になったのかもしれない。日本の革命家である織田信長の下に後の豊臣秀吉がついたのも、秀

吉が一心に一身を捧げられるようと頼み続けたという、ただそれだけの理由なんだから」

僕は革命家じゃないけどね。単なるボランティア活動の精神さ。と続けた。

いまだ笑顔で。

「そうは言っても、百筋縄でもいかないところじゃねえか？ 何せ本当に、無理難題に挑戦するようなもんだからよ」

「そうは言うけど、千筋縄を持ち出せば何とかなるんじゃないかな——なんてね、心配するなよ鶴舞君。無論、勝算がない交渉をするつもりはないさ。僕だって利益を求めない生き物じゃない」

余裕綽々。

笑顔は本当に、今までは仮面をつけていたようであつた彼の顔が、とても深い味を出している。

だしがとれそうだ。

「一人は快く了承してくれるだろう。もう一人、そこそこ強引にいけば問題ない。さらに一人は、どちらに転ぶかわからないまでも、やり方次第でどうにかなりそうな子だ。そして最後の一人は、そこそこ用心してかかるべきだと思ってる。命がかかっていると言ってもいい。キミならどういうことかわかるだろう？」

なるほど確かに、勝算がありそうな口ぶりだ。根拠はなさそうな口ぶりだけだな。

それにしても、命がかかっている……ねえ。

あつはつは、それこそ言い方が過ぎてるよね——とか、そんな感じに続けてくれればいいものを。

現実には甘くないというか、虚実でさえも俺を欺くというか、本当

に言い切れないが——だけど新瑞橋は真剣だ。

張り付けたような用意されていた顔、の一つに見えなくもないけれど。

新瑞橋は笑顔を消して、いたって真面目に俺の目を見つめていた。

「わかるぜ、新瑞橋。俺は二度と殺されない」

「わかってくれて嬉しいよ、鶴舞君。キミは二度と殺されまい」

なんて言葉を交わした。

新瑞橋の表情は、とたん緩んだものに戻る。

さて、このモノログの中だけで、大幅に話が変わるので気をつけてほしい。

急に『命がかかる』とか『殺す』とか、物騒な言葉が並んだのは俺にとっても意外だった。だけど、日常的会話レベルでそんな話題が出るくらい、世の中には『殺す』ことと『殺される』ことがあることを、誰かが自覚しなければならない。

例えば、新瑞橋休は言葉で人を殺すことができる。

以前はまるで比喻のように言ったかもしれないが、これは真実だ。新瑞橋は言葉で殺されて、自殺を行いかけたらしい——というのは聞いた話だ。

しかし言葉を克服し、掌握し、使役して——言葉で、意図的に！人を殺すことができる。

俺も似たような人間だ——いや、人にあらず。失礼した、俺こと鶴舞芽も新瑞橋と同じように——人外である。

俺がいったい何に殺されたかを語るのには時間が足りないが、とにかく、『殺す』『殺される』が成り立つのは別に物理的な意味合いだけではない。

物騒な話だと思うかもしれないが、俺はそうは思わない。

たとえばこれが『小説家になろう』に掲載されている小説だったとしても、『残酷な描写あり』のタグどころか、『R-15』のタグさえつけられることはないだろうぜ。

ああ、新瑞橋の赤裸々で変態的な妄想が、垂れ流しにならないと仮定してのことだけど——とか言って、最後に冗談を混ぜておこう。

さて、話題に戻る。

「つまり、それだけの何かを所有する人物なんだろう？」

「だと思う。僕とて全てを知っているわけじゃないから、僕の懸念が杞憂に終わるのなら、それはそれでいいんだけど。しかしその難易度の高い彼女は、四人の中でもっとも危険率が高い——かな。主観に過ぎないけどね」

「女なのか？」

「おいおい、驚くのはそこかい？ 女だよ。まさか、僕たちみたいなのが男限定だと思っていたわけじゃあないだろうね。最近は戦うヒロインだっているんだぜ。行き過ぎれば、ヒロインが最強なんてこともある」

女性に対する差別的な考え方だよ、それは。

新瑞橋は俺を侮蔑するように見下げる。

そうだろうとも、考えていればな。

別に、驚いたつもりもなかったし、僕たちみたいな、殺されて殺せるようになる人物が男だけだと決め付けた覚えもない。

そんな考え方は、江戸時代までしか通用しないことはさすがの俺でもわかる。

新瑞橋は俺から目を離して、今度はおどけるように肩をすくめ、

手をひらひらと振りながら言葉を続けた。

「言っちゃえば、全員その可能性はあるんだけどね。むしろそういうメンバーを選別したと言ってもいいんだよ。そしたら、たまたま有名な彼、彼女らが当てはまったというだけの話さ」

「偶然か？」

「偶然だろうね。そして自然に見えるけど、もしそれが必然で当然だというのなら、それは突然に仕組まれた何らかの意図だと思うべきだろう」

糸を引いている奴がいるのさ——意図だけに。

新瑞橋は小さく笑い声を漏らしながらそう言った。

ちよつと殴りたくなった。

あまりうまくないぞ。

と、ここまで話しこんで。

俺は重要な事態に気づく——いや、別に俺はどうでもいいのだが、しかし前提として、コイツの遊戯に俺も付き合うこととなるのだから、アドバースの一環として、俺は重大なことに気づいたのだ。

「誘うのはいいんだがな、新瑞橋」

「うん？」

いや、いいとは思っていない。思っていないが、しかし、ここは流れるにそういう場面だったろう。

新瑞橋はきょとんとして、俺のほうをチラリと見た。

「明日から夏休みだ」

「そうだね。サマーヴァケーションだね」

「そう、サマーヴェイションなんだが、それはつまり、交渉で

きる相手が学校に登校しないということじゃないのか？」

「————」

笑顔が凍りついて、まるでハニワのような顔になり、それがふつと戻って——しかし張り付けられていたような笑顔はさっと引いて、その数分後に俺は紙に書かれていたその四人を探し回ることになる。

案外、この人は考えなしだったりするのか？

で、全速力の競歩（廊下を走ってはいけないということは、日常レベルでとある知り合いに強制されていた）で探し回るも見つからず——当然だ。その四人がどこぞの部活に入っているということは、これから勧誘する身としては幸運なことだが、まったく聞いていない。それはすなわち、昼飯を持っていなかったであろう四名は既に帰宅し、各自思い思いのことをしていることだろう。

夕方、夏ゆえに日はまだ高いが、それでも時計の短針が下を向き始めた頃である。

俺と新瑞橋は部室に合流した。

俺が後から来た形になるのだが、新瑞橋はわかりやすく落ち込んでいた。

下足箱の一つに、顔を突っ込んでいたのである。

汚い——と思ったが、その下足箱にセロハンテープで張り紙がしてあったことで、俺はその言葉をすんでのところで飲み込んだ。

『そう思われると思って、すでに綺麗な雑巾で中を磨いておいた』

だそうで。

何だコイツ、超能力者？

呪いの呪文（字が被っているな）を吐きながら沈んでいる新瑞橋

に帰宅の一言を告げ、彼が沈黙で返したのを確認してから俺は部屋を出た。

付き合っているかもしれない。

そんな感じで、二日目はこのように過ぎていった。

02 誤算ありき勝算（後書き）

作中で『半月に一回』とありましたが、実際は半月に一回も更新できません。毎日が冬休みでもありませんから。

とりあえず、知り合いの頭いい人に勉強を教えてもらおうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6028z/>

御口直しに御話を

2012年1月9日19時47分発行